慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歐洲人の極東研究(二)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.43(365)- 60(382)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐洲人の極東研究（二）

南海語とアメリカ大陸語との交渉

——リヴェ氏の新研究——

これまで舊世界と新世界との言語の間に於ける聯鎖をうち建てんとする全ての企圖は、エスキモー語を除く外は失敗に終つた。不結果の連續に世人は、アメリカ諸語は、その久しい獨立的發達の間に、古代の面影を悉く失つたのではないかと恐れた程である。所が、最近フランスの有數なアメリカ學者であり、現に巴里自然科學博物館人類學部の主事なるリヴェ Rivet 氏が、北アメリカのホカ Hoka 語群がメラノ・ポリネジア語系と關係あり、南アメリカの一語群が、オーストラリアの諸語と密接な親緣あることを指摘した。氏の研究は主として語彙の比較に基き、從つて一部言語學者のなほ容認する所とならぬ。然もその發見の當初一九二四年十二月十二日フランス言語學界の耆宿たるアントアン、メイエ A. Meillet 氏は、學士院金石及び文學部 Academie des Inscriptions et Belles-Lettres に於てリヴェ氏の二研究に就

て報告し、同氏の學說の有力なる支持者となつてをる（註一）。リヴエ氏の云ふ如く南海語とアメリカ大陸語との間に親緣關係ありといふことは、急速に信じ難いが、相互の交渉は認め得べく、同氏の研究は、アメリカ語起原如何の難問題の解決に一流の光明を投じ、將來の研究の方向を暗示したるものと云ふべきである。

氏が、巴里言語學協會雜誌 Bulletin de la Société de linguistique de Paris 二六卷、一、二分冊（一五二五年）に掲載した「アメリカに於けるオーストラリア人」Les Australiens en Amérique 中には、先づ南米のツオン（Tson）語群とオーストラリア語との關係を論じてをる。前者は普通パタゴン Patagons と呼ばれ、その支族オナ Ona と共に南米の南端に住する印度人の言語である。是等の言語は、現在なほ充分に調査行き屆かず、その語彙は、主として旅行者のあはたゞしい滯留の間に採集せられしものに過ぎない。その發音標記も人によつて區々として各種方言と比較音韻學の樹立は殆ど不可能の狀態である。

是等の言語の相互關係を研究するには、語彙の比較を除いて方法がない。リヴエ氏は、オーストラリア語とツオン語との間に九十三の共通語根を發見し、ペール・シユミットのオーストラリア諸語の比較語彙はその數四十四語よりなるに比すれば數遙かに多しとなし、かつその比較せられて語の形が屢甚だ酷似し、最も變化少きものと思惟せられる單語よりなることを指摘し、その方法たとへ不完全なりと雖

も、結論は信頼するに足ると述べてをる。

今同氏の擧げた表の中より最も著しきものを少しく擧げてみやう。

火

オーストラリア語　makka

ツオン語　maka

水

オーストラリア語　Koon-do, Kan, Ku-Kun

ツオン語　Kon（河）

Kono（海）

手

オーストラリア語　mar, marra,

ツオン語　marr

目

オーストラリア語　gaikung kaieka.

ツオン語　gaiken.

kaikén（見る）

皮膚

オーストラリア語　akoi, kai

ツオン語　kai,（皮）、kaih

尻

オーストラリア語　coi（股）

ツオン語　koi, koy

舌

オーストラリア語　tale, tallán, etc.

ツオン語　taal, tal, del,

單語の對應表中からリヴェ氏は、數詞及び代名詞の缺除せることを指摘し、ツオン語がオーストラリア語より極めて攸久の古へに分離せることを論じ、かつツオン語が殊にオーストラリア東部の諸方言と類似を示すことを統計により示し、オーストラリアよりアメリカに向ふ移住は、此大島の東部を起點として行はれたと結論してをる。

南米の最南端オナ族の間にオーストラリア要素の存在することは人類學上土俗學上からも傍證される。オーストラリア人の頭蓋骨に極めて類似せるものがパタゴン族オナ族の頭蓋骨中に發見されてをる。土俗誌及び社會學の立場よりオナ族の文明とオーストラリア文明との間の關係密接なることを證明したのはグレブナー Graebner ペール・シュミット le Père Schmidt 兩氏の功績である。然しリヴエ氏は之になほ若干の重要な類似事實(皮の上衣、密房形小屋、紐の編方其他)を加へ、更にマーセル・モース氏も亦オナ土人の社會的現象オーストラリアのそれと類似點あることを指摘したと附記してをる。

どういふ徑路でオーストラリア人が南米に到達したか。太平洋を北側から迂回して南アメリカに至つたとは現在到底考へられない。突飛ではあるが海路によつたと想像する方がより論理的である。多分メラノ・ポリネジアンの移住に先立つたものであらう。數字にすれば恐らく三千年以前に遡るのではなからうか。かやうな長年月の間語彙の宗全に保存されたことは一寸不思議に感ぜられるけれどもッオン族の文明がアメリカ大陸中最も遲れた狀態に位する所から見て怪しむに足らぬ。たゞオーストラリア人の如き未開人種がどうして海上移住をなし得たかが疑問である。現在彼等の持てる船では到底かゝる長航海はなし得ない。兩者に於て航海術が非常に退歩したと見ねば此疑問は解決つかぬ。こうリヴエ氏は結論してをる。

北アメリカのホカ語族が、インドネシア、メラネシア、ポリネシアの諸語と關係を有することを立證してをるのは、同氏が、パリー・アメリカ學協會雜誌（Journal de la Société des Américanistes de Paris）新集、卷十八、一九二六年の號に發表した「アメリカに於けるマラヨ・ポリネシアン」Les Malayo-Polynésiens en Amérique といふ論文である。

氏は先づ最初に人類學的方面よりキャルフォルニア半島南部に住みたる土人は、メラネシアと關係あること頭蓋骨研究によつて證明せられたることを說き、つぎに土俗誌の立場より多くの相似點アメリカとマラヨ・ポリネシア相互間に存在することを擧げ、最後に言語學的證據としてオレゴン州の南より、ニカラグアまで擴がつたホカ語族が、マラヨ・ポリネシアン語系に屬することを述べてをる。ホカ語の比較文法學はなほ樹立されず、比較語彙もなほ不完全である。しかも貧弱なこの語彙の研究によりリヴエ氏は、實にマラヨ・ポリネシア語とホカ語との共通語根二百八十一を發見してをる。この論據を補足するため、氏はなほ形態學上の比較もなしてをる。

代名詞　メラネシアには二種の代名詞卽ち獨立した代名詞と他の名詞、前置詞の後添へ（suffixe）となる代名詞と二種あり、ホカ語族には、前者の代名詞第一人稱と第三人稱の語根 na 及び ia とが存在する。マラヨ・ポリネシアンでは屢前添へ（préfixe）ko 又は 'o- が第三人稱 ia の前につくが、ホカ語族の或者にも同じやうな前添へ（préfixe）を發見する（Ka-ya, he-yo'）。

メラネジア代名詞の第二形、後添へとなるものは、次の表の如くである。

第一人稱 ka

第二人稱 ne

第三人稱 na

ポリネジア、ミクロネジア、インドネジアにもこの形式の代名詞が存する。インドネジアでは、或時は前添へとなり、或時は後添へとなる。ホカ語にもこの三形あり、獨立的に用ひられる場合又は前添へとして用ひられる場合後添へとして用ひられる場合と三つの用法が存する。

冠詞、メラネジアでは指示的な冠詞が存在する。これに ni と ta の二種あり、ポリネジアでは、第二形 ta が優り、ミクロネジアのアロライでは nei といふ冠詞あり、インドネジアでは兩形とも存する。ホカ語に此兩種が指示詞（démonstratif）として存在し、或時は冠詞の職分を演じてをる。

人稱冠詞(Article personnel)　メラネジアには固有名詞の前につく冠詞 i, e, a があり、親縁を表す名稱及び役人の名に對して又或言語に於ては代名詞に對しても使用される。ポリネジアにてはマオリ、トンガ、ラロトンガに a 形の人稱冠詞あり、其他にては代名詞中に保存されてをる。ミクロネジアでも之と同樣であり、インドネジアでは ni といふ形式が一般的で、マダカスカルだけに i といふ形の人稱冠詞が存する。然し代名詞の中には他の形式も保存されてをる。ホカ語では、親族呼稱に a 又は i

を添へる。たとへばホモ方言にては次の如くである。

父　a-mee, a-men, a-pen（北、南、南西の方言）i-mek（南東の方言）

此語族に人稱冠詞の存することは疑ひない。

名詞の前添へ（préfixes nominaux）　メラネジアの一部では i- といふ前添へを附して動詞から名詞をつくる。これが或所では e-, a- となる。ポリネジアやインドネジアにもこの形式が冠詞として用ひられてをる。ホカ語に於ては多數の名詞が同樣の前添へを有してをる。

形容詞　メラネジアでは形容詞は特色ある語尾を有してをる。その中もつとも屢〻使用されるのは -ka 又は -ga と -a との間の全ての形式である。喉音 g 又は k が次の樣に氣音 h によつてかへられ、その h がついで消滅してしまふ。

-ka, -ga, -ha, -'a, -a

その母音はいろ〳〵に變化する。ポリネジアにもインドネジアにもこの形式の語尾が存する。然るにホカ語にも全然これと同樣の事實が見うけられる。

大い　vaté-ga

小い　keti-ga

メラネジアに於ける今一つの形容詞の後添へ -ta, -da, -di, -ti, -s の系列は、ポリネジアにごく稀れに

存し、インドネジアにては數詞の中に存するが、ホカ語族中にも之を發見する。

若い　amaniti-ta

寒い　eso-ta

メラネジアの一部で用ひられる　-va,-pa　といふ形容詞の後添へに該當するものはホカ語族の間に ve,vi,wi,bi,va 等の形式からなる系列として存する。メラネジアの -ma, -mu, -m なる後添へも、之と同様ホカ語に存する。-na, -n, -ni の後添へも亦メラネジア語ホカ話に共通である。

動詞の活用(coujugaison)　命令法と未來をあらはすにマラヨ・ポリネジアンに於ては ka といふ前添へを使用する、これがホカ話にも存する。その外 me といふ命令形の前添へは、メラネジア・ホカに共通、メラネジアの ni-, na-, n- 未來形の前添へは -no, -n-, -la, n- 等の形式になつてホカ語に存する。約束法を表はすメラネジアの前添へ ta-, t-, to-, to- はホカ話に t(a)- の形ちで存する。

助動詞　メラネジアの so- といふ形式は、ホカの一方言に於ける so- に相應ずる。

動詞的後添へ(Suffixe verbaux)　次の後添へがマラヨ・ポリネジアンとホカ語に共通である。

-k 及びその派生語

-ts, -t, s, -s

-we, -ve, -ba, -pa, -p

-re

-me

動詞の短綴添附詞(particles verbales)　これもマラヨ・ポリネジアン及びホカ語に共通のものが多數存在する。

k-; t-; w-, p-, b-; a-, ha-; i-, e-, he-, hi-; ho-, o-; m-; n-;

是等の短綴添附詞の多くはマラヨ・ポリネジアンに於て形容詞にも用ひられる。之はホカ語族でも同樣である。

數詞　マラヨ・ポリネジアンに於ては、數詞にいろ〳〵の前添へを附するが、皆その對應をホカ語に發見する。

否定　これも共通の短綴語或ひは短綴添附詞か存在する。

反覆(Réduplication)　マラヨ・ポリネジアンでは此現象は、非常に普及してをるがホカ語に於ても同樣で、類似の目的に使用されてをる。

以上の比較から南海語とホカ語との關係は證明せられるが、然し此種の研究に最も重要な役割を演ずる語彙の比較は、どうであらうか。今同氏の擧げた例の中主なものを引用すると

數詞

一′	ポカ	pun, p'un
	メラネジア	se-bona, ko-puna
一′	ポカ	me-sig, tšaki
	メラネジア	sika, saka-i, e-sega
一′	ポカ	tša, ta-to
	メラネジア	sa, sa
	ポリネジア	ta-hi, ta-sa
	インドネジア	isa, ta-hi
二′	ポカ	go-wa-c, gò-guo, ha-wá-ka
	メラネジア	wua-a, wo, ua
	ポリネジア	hua, gua
三′	ポカ	dol
	メラネジア	tolu
	ポリネジア	tolu

史學

	インドネシア	telu
四	ホカ	ho-ba, ho-pa, ha-wa
	メラネシア	va-ni, pa-l, va-ti
	ポリネシア	va, wha, fa
	ミクロネシア	a-ua
	インドネシア	a-m-pa-t, pa-t, fa-i
五	ホカ	ha-tabu-k, hû-tapa
	メラネシア	thâbû-ny, taba-lima
五	ホカ	lēma
	メラネシア	lima
	ポリネシア	lima
	ミクロネシア	lima
	インドネシア	lima
七	ホカ	vika, paka-i
	メラネシア	pik, fiak

ポリネジア　e-fiku

八

ホ　カ　varu-k (10), k-walo (9)

メラネジア　e-walu, wal

ポリネジア　varu, valu

ミクロネジア　e-wal, ualu-man

インドネジア　valo, walu, waru

九、

ホ　カ　sîwah (many), sîpa-huk (8)

メラネジア　siwa

ポリネジア　siva

インドネジア　siwa

行く

ホ　カ　wana

メラネジア　wana

ポリネジア fano

インドネジア fahmo

云ふ

ホ カ -pa, ba-

メラネジア ba, pa

ポリネジア haka-va, va

云ふ

ホ カ t'ola.'-so（叫ぶ）

メラネジア taro

ポリネジア tara-tara

インドネジア talo

語る、云ふ

ホ カ mau

ポリネジア mu-mu（つぶやく）

見る

ホ　カ　um

メラネジア　ome

ポリネジア　umi（望む）

見る

ホ　カ　iki

メラネジア　ika

ポリネジア　ike

眠る

ホ　カ　me

メラネジア　me

木

ホ　カ　pon

インドネジア　poon

火

ホ　カ　apu, apu

メラネジア　av
ポリオジア　afi
インドネジア　api, apu, efi

太陽

ホカ　alla, ora
メラネジア　aru, aro
ポリネジア　ra
ミクロネジア　al
インドネジア　lau (day)

以上の如き著しく類似する語根二百八十一を擧げてをる。かくの如き重要な單語が、一致を示す以上ホカ語が、マラヨ・ポリネジアンその中でも殊にメラネジア語と關係あることは明かである。いはんや、兩者の親緣が人類學上土俗誌上からも傍證せられてをるにおいておやである。メラネジア人がポリネジアの舊住民たりしことは既に容認されてをる。恐らくメラネジア人はポリネジアを經てアメリカに到達したものであらう。その年代は恐らく二千年か二千五百年以前であらうか。その移住は一時的になされたものに非ずして幾度か繼續的に波うつてなされたに相違ない。アメリカ印度人を構成する主要要素は、

多くの學者のいふやうにベーリング海峽を經てアジアより到來したに相違ない(註二)。かしかし太平洋民族――オーストラリア人及びマラヨ・ポリネジア人の要素また今日のアメリカ土人を形成する一因素たりしことを忘れてはならぬ。かうリヴエ氏は結論してをる。

同氏の所論に自分は大體贊意を表する。然し同氏の研究は、未だ調査極めて不完全なる諸語の上に立脚してをることを忘れてはならぬ。從つてその結論は、充分警戒して採用しなければならぬ。ホカ語とメラネジア語との親緣關係はほとんど肯定なし得るが、ツオン語とオーストラリア語とが相互に親緣關係ありと斷ずるのは未だ時期尚早の觀がある。比較した語彙も純萃の同義語が少い。これだけでは兩言語の相接觸が證明なし得たに過ぎぬと思ふ。ホカ語とメラネジア語との間の親緣は、余程確實性を帶び てをる。或人は、語彙の比較に重きを置くことを言語學的でないとそしるであらうが、なにしろ此種の言語群の比較研究は、インド・ユーロピアンのそれとは全然ことなつた準據によるべきものであり、語彙の比較が此場合比較的信賴するに足る證據を供給するのである。リヴエ氏の論文はよし蓋然性を帶びたものとは云へ、實にアメリカ語の起原について光明をもたらし、將來研究の方向を暗示した創意的の好研究と云ふべきである。

(註一) Rivet (paul),

Les Mélanéso-polynésiens et les Australiens en Amérique. Comptes rendus des séances de l'Académiedes Inscriptions et Belles-Lettres. Paris, 1924, p. 235-242.

(四二) Aleš Hrdlička, The origin and antiquity of the american indian (Annual report of the Smithsonian Institution, 1923, p. 481-494) 參照。

松本信廣